随筆・紀行　＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

東日本大震災に被災して（その25）
―原発避難の立場から―

今野外科医院（休院）
今　野　　明
（現在：北福島医療センター）

能登半島地震

2024年１月１日午後４時10分、能登半島に最大震度７（M7.6）の地震が起こった（写真１）。震度４以上の余震も頻回で、沿岸部には短時間で津波が到達した。家屋倒壊や土砂崩れ、各箇所で道路が寸断され緊急の救助もままならず、亡くなった方は241人となり安否不明者も７人いる（３月１日現在）。犠牲になった方、そのご家族に哀悼の意を表します。また避難を余儀なくされた方々に心からお見舞いを申し上げます。

１年の内でも最も平穏な元日に、しかもコロナ禍も明け５類に移行して初めてのお正月を迎え、久し振りの帰省で賑やかな一家団欒の筈が一変した。逃げる間もなく倒壊した建物の下敷きになり帰らぬ人となった方も多く、その被害の甚大さに言葉を失う。半島という地形の特徴で、沿岸の道路が寸断され何事にも大きな支障となった。断水も解消されるにはまだ時間を要し、感染症の拡大や長期化する避難生活に心のケアが重要だが、関連死の増加も懸念され心が痛む。

福島民報
石川で震度7、死者57人
広範囲に壊れ ビル倒壊や火災
一時、大津波警報
本県 最大震度4

（写真１）　’24.１.３　福島民報「能登半島地震」

被災13年

11年３月11日に起きた東日本大震災・東京電力福島第一原発事故から丸13年になるが、当時のことがフラッシュバックのように蘇ってきた。避難の状況や心情が手に取るように分かるだけに、自分達の経験や教訓は生かされたのかという思いを抱かざるを得ない。稼働していなかったとは言え、北陸電力志賀原発も変圧器のトラブルが発生し再稼働へのリスクが露呈した。珠洲原発建設事業が住民の反対で中止となった過去があったが、計画通りに建設されていたら更に深刻になっていたことは想像に難くない。活断層の再評価は避けられないし、安全・安心を最優先すべきなのに避難経路も確保困難な地震や激甚災害の多い日本で、済し崩し的に再稼働を推進する政府の姿勢は甚だ疑問だ。

原発処理水海洋放出

東京電力は、福島第一原発事故で増え続けるＡＬＰＳ（多核種除去設備）でも浄化出来ないトリチウムを含んだ処理水を、漁業者らの反対を押し切る形で23年８月24日海洋放出を開始した。しかし、処理水漏れなどのトラブルが続出しており、現場の危機管理能力や公表のあり方などは相変わらずで信頼が置けない。廃炉作業も計画段階で延期を繰り返しており遅々として進んでいない。柏崎刈羽原

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊ 随筆・紀行

発の対応などをみても、東京電力の基本的な姿勢は震災前と変わっていないのではないか。原発を運転する適格性を疑う声が消えていない。

南相馬市原町区の医療

南相馬市立総合病院（及川友好院長）は、23年４月から眼科の山田茂明先生（前任：富山県立中央病院）が常勤で診療を開始した（本会報23年８月号「緑陰随想」ｐ.31－32）。24年２月からは小児科に今村孝先生（前任：太田西の内病院ＮＩＣＵ室長）を迎え今後新生児の医療も充実させたい意向だ。皮膚科に東北医科薬科大学医学部皮膚科主任教授の川上民裕先生が毎週月曜日午後の予約診療を担当している。一方、小児科の山下匠先生は原町区内に「はらまちスマイルクリニック」を開院予定、相双地区初の病児保育施設も期待されている（写真２）。

相馬郡医師会事務局刷新

相馬郡医師会事務局は長年ひとりの女性が担当していたが、複雑多様化する業務内容と健康不安から退職。新道譲二先生（しんどうクリニック院長）が新しく郡医師会長に代わるタイミングで、22年４月から善里里織さん、

（写真３）　相馬郡医師会事務局
（左から善里さん、平田さん）

平田容子さんの二人体制に刷新した（写真３）。新道先生が南相馬支部長の20年から新型コロナ感染症対策に関わっており、郡医師会と行政側が一体となって全国に先駆けるシステムを構築するなど、発熱外来、ワクチン接種業務等で市民に大きく貢献したことは特筆すべきだ。

浪江町の動き

浪江町は東部の避難解除区域以外はほとんどが帰還困難区域だが、津島地区の復興再生拠点区域内に「津島住宅団地」が完成し、23年３月31日に避難指示が解除され10軒の入居が可能になった。一部でも地元に戻れたことは住民にとって新たな希望が見えてきたところだろう（写真４）。

（写真２）　病児保育も期待されている

（写真４）　津島住宅団地

随筆・紀行 ＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

（写真５）　F-REI 事務所

（写真６）　ふれあいセンターなみえ

23年４月１日、政府が福島・国際研究都市（イノベーション・コースト）機構の核として放射線科学やロボット、農林水産業、エネルギーなど５分野で世界最先端の研究開発に取り組む福島国際研究教育機（Ｆ－ＲＥＩ、エフレイ）事務所が、ＪＲ浪江駅西の「ふれあいセンターなみえ」の一角に開所した（写真５、６）。原発事故後の研究機関として有機的に機能してもらいたいものだ。浪江町出身の日本画家舛田玲香さん（梁川美術館で展覧会を開催：写真７）が描いた陶板が建物の壁や通路に飾ってあり色を添えていた（写真８）。

大堀相馬焼の里が特定再生復興拠点に含まれ、「陶芸の杜おおぼり」が23年６月３日12年ぶりに再開した。各避難先で作品作りをしているが地元に戻った窯元はまだないそうだ。

（写真７）　舛田玲香展（梁川美術館）

館内では被災直後の様子と各窯元の作品が多数展示されていた（写真９）。

17年３月開設された浪江診療所に、23年９月19日には小児科の先崎秀明先生（埼玉県川越市）が着任した。18年４月からなみえ創成小・中学校や浪江にじいろこども園も開園して小児医療の再開が望まれていた（写真10）。診療所での診察は月１回だが、24年２月からは遠隔診療にも対応することになって住民には大変心強い。待望の調剤薬局も開設された（写真11）。

（写真８）　通路に作品

（写真９）「陶芸の杜おおぼり」

（写真10）　浪江にじいろこども園

小高区の動き

筆者の医院東隣にあった「青葉寿司」は23年７月１日にリノベーションされ、パン店とカフェ、貸しスペースを併設した交流拠点「アオスバシ」として再開した（写真12）。大阪府出身の森山貴士代表は「移住者と地域住民の接点にしたい」と意気込みを語っている（写真13）。イートインもあり寛げる雰囲気がいい。

23年７月12日には、3.11＆福島原発事故伝承アートミュージアム「おれたちの伝承館」が開館した（写真14）。アーティスト、スタッフ、双葉屋旅館が中心になって、大震災・原発事故を機にそれぞれの表現方法で伝承していくエネルギーが集約した手作りの展示館だ。開館翌日に入館すると、原発避難者の想いを見事に天井画で表現した山内若菜さんが、自ら館内を案内、解説してくれた（写真15）。箱物の伝承館ではない生の息づかいが感じられ多くの人に観てもらいたい施設だ。

23年７月22日、国指定史跡「浦尻貝塚」の観察館が公開された。5000年前の貝塚を発掘調査したそのままの状況で見学できる（写真16）。「縄文の丘公園」の一環として24年全面オープンの予定になっているが、津波を免れたこの貴重な史跡がこの機会に広く知れ渡れることを願いたい。

23年７月29～31日は地元の「相馬野馬追」が、コロナ禍以来久し振りに観客を入れて開催された。1000年以上続く伝統行事だが、今年は記録的な猛暑のために観客はもちろん、参加した馬も熱中症で３頭が死ぬほどであった。開催側もこれを機に日程の検討を行った

（写真11）　なみえ調剤薬局（奥が診療所）

（写真12）「青葉寿司」から「アオスバシ」へ

随筆・紀行 ＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

（写真13）　森山代表（後は寿司ネタ札がそのまま）

結果、24年は５月に前倒しになり25～27日に決定した（写真17）。伝統を継承することは変化も柔軟に受け入れなればならないということなのだろう。

記録を残すということ

22年４月から小高区の住民グループ「希来基金」（代表：双葉屋旅館女将／小林友子さん）が、震災前後の小高区の様子を住民に話

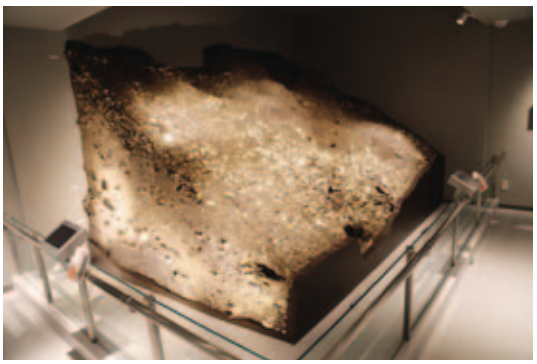
（写真15）　自分の天井画を紹介する山内若菜さん

（写真14）　おれたちの伝承館

してもらう「おだかのあかりアーカイブ・プロジェクト」が進められている。これまで何回か小高区の浮舟文化会館や双葉屋旅館で発表会も開かれているが、今回その内容を冊子化した「おだかのあかりⅠ」が発行された（写真18）。忘却を前提に伝え継ぐことが防災に結びつく。震災・原発事故から13年が経過し記憶も曖昧になってしまう前に、後世に継承すべく記録に残すことは非常に重要なことだ。文字起こしも方言が入ったりして大変な作業だが、地道に進めている関係者に頭が下がる。

避難区域での診療再開から10年

南相馬市小高区の避難指示解除前に、南相馬市立小高病院の外来機能のみを再開してから24年４月23日で丸10年になる（現：市立総



（写真16）　実際の貝塚

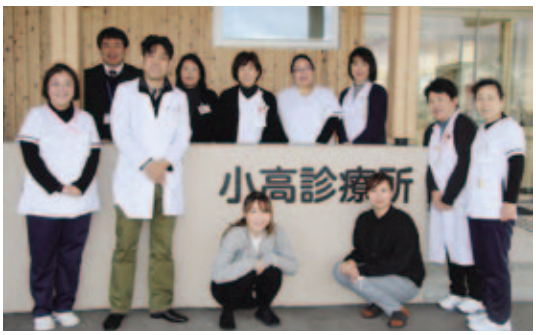
＊＊ 随筆・紀行

（写真17）　今年の野馬追ポスター

（写真18）　おだかのあかりⅠ

合病院附属小高診療所／小鷹昌明所長／写真19)。再開当時はまだ住民も住めないのに診療開始を疑問視する向きもあった。しかし、帰還準備や復興作業などに避難区域初めての医療施設として役割は大きかったと思われる。避難中の患者と久し振りの再会を果たした時は、お互いに涙と笑顔で被災の様子を聞くだけで時間が過ぎていく。このような場所があるのは住民の心の復興に重要な意味がある。

起ち上げ時より二本松市から通っていた元院長の高橋哲之助先生は、この３月末で退職されることになったが、その貢献度は大いに評価されるべきで、大切な同志を失うようで非常に残念だ。高橋先生大変お疲れ様でした。神奈川県茅ヶ崎市から震災後継続して来ている中尾誠利先生もメンバーの一人で、南相馬市に身を粉にして尽力されている。このような方々の支援に改めて心から感謝したい。



（写真19）　小高診療所スタッフ
（前列左から２人目が小鷹所長）

梁川病院閉院→北福島医療センター吸収統合

震災の年、11年10月１日伊達市から公益財団法人仁泉会に移譲された梁川病院は、50床の県北唯一の介護療養型医療機関であった。1958年の梁川町国民健康保険診療所の設立から65年の歴史があり、伊達市立病院になって

（写真20）　12年間お世話になった梁川病院

随筆・紀行 ＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

（写真21）　北福島医療センター

からも「梁川国保病院」と地元住民に親しまれていた（写真20）。

常勤医は浪江町から避難中の西病院院長：西貞隆先生と、筆者の二人が任された形になった。特に寝たきりの入院患者対応で介護の現状や終末期医療などに関わり、自分としては急性期と違った分野で貴重な経験を積むことが出来た。

介護療養病床制度の廃止に伴い医療療養病床に転換するも、建物の老朽化と制度移行に伴う対応が困難なため、23年７月31日に閉院となった。地元には申し訳ない気持ちであるが、筆者が院長として勤務した約12年もの間、地域医療の継続に支援してくれた関係各者に感謝している。伊達市の意向も確認して同法人（木村秀夫新理事長）の北福島医療センター（松本進院長）に入院・外来機能を吸収統合された（写真21）。８月から「療養内科」として外来患者は送迎を利用しながら、中には１時間もかけて遠路はるばる受診を継続してくれることが有り難い。

（写真22）　故 佐藤喜一先生

放射線治療センター

当法人の前理事長・佐藤喜一先生は以前から「トモセラピーを充実させたい」との意向があり、梁川病院閉院後はそちらに力を貸して欲しいとの要請に、避難の最中お世話になった恩義があり受諾した。伊達地方・県北地域の医療に関して佐藤先生の功績は大きかったが、惜しくも23年４月12日94歳で泉下の人に

（写真23）　放射線治療センター

（写真24）　放射線治療スタッフ（前列中央が湯川先生）

（写真25） 花見山から福島市内方面の眺望

（写真26） メガソーラー建設予定地

なった。改めて心からご冥福を祈りたい（写真22）。生前の約束を守り遺志を継いで８月１日から北福島医療センターの放射線治療センターに勤務している（写真23）。

当治療センターでは23年１月に最新機器に入替え、福島県立医科大学医学部放射線腫瘍学講座（主任教授：鈴木義行先生）と連携して、センター長の湯川亜美先生を中心に、主に前立腺癌や悪性リンパ腫、乳房温存手術後照射などの治療を行っている。自分が加わることでより積極的に強度変調放射線治療（ＩＭＲＴ）や定位照射などの高精度放射線治療が可能になった。嘘のような治療効果を目の当たりにして驚きを隠せなかった。このような放射線治療が実施出来るのは県北地区では福島医大と当院の２施設のみだが、相馬福島道路などの交通アクセスにより相双地区の症例も増えて来ており、故佐藤先生が望んでいたように浜通り方面でもこの治療の恩恵に与ることを期待したい（写真24）。

（写真27） 西村由紀江の SMILE WIND

再生エネルギーは共存できるか

冬の福島市内から西に雪化粧の吾妻連峰が見えるが、右裾野には景観を損ねる部分がある（写真25）。福島県が進めるクリーンエネルギーのためのメガソーラー（大規模太陽光発電所）建設予定地（区域面積345ha）である（写真26）。24年２月木幡浩福島市長は県に対

（写真28） 復活した双葉中学校のピアノ

随筆・紀行 ＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

（写真29）　明るく素敵な笑顔の山本さん親子

し、環境や景観保全の観点で事業者を適切に指導・監督するよう要望書を提出した。福島市ばかりではない。空いている土地があればソーラーパネルに埋め尽くされている。自然を壊してまでも推し進めなければならないことか。自然と再生可能エネルギーの共存はできるのか。

癒やされるＦＭ番組「西村由紀江のSMILE WIND」

日曜日の早朝、ふくしまＦＭ（ＦＭ青森、ＦＭ岩手、ＦＭ仙台では土曜日）で放送される「西村由紀江のSMILE WIND」は、ピアノの美しいメロディーとともに「あなたは誰と繋がっていますか…」と始まるとても素敵な番組だ（写真27）。ピアニストの西村さんは、東日本大震災で被災した地域に音楽とピアノを届ける息の長い活動を続けている（「Smile Piano 500」）。23年11月４日には、復興の後押しのために浅野撚糸株式会社（本社：岐阜県／浅野雅巳社長／福島大学卒）が４月に設立した双葉事業所（福島民報社第９回「ふくしま産業賞」知事賞受賞）でリサイタルを開催した。工場、見学コース、タオル製品直売ショップ、アウトレット、「Key's Café」などを備えた観光施設（フタバスーパーゼロミル）の中庭で、帰還困難区域に取り残されていた双葉中学校のピアノが復活、双葉中学校の校歌など復興を願う音色が響き渡った。西村さんを始め番組も企業も被災地に寄り添う姿勢が胸を熱くし有り難い（写真28）。

双葉中学校の卒業生でもあり当日の司会を努めた山本敦子さんは、震災後横浜に避難して辛い思いをしていたが、地元の復興に関わりたいと20年に設立された双葉町産業交流センター（東日本大震災・原子力災害伝承館隣）のファストフード店「ペンギン」（震災前はＪＲ双葉駅前にあった）の新店長になった。多くの人との出会いや様々なイベントに関わりたい思い、その経緯も番組で詳しく紹介されていたので実際に行ってみた。初対面なのに馴染みのような温かさで迎えられ、人気№１のスペシャルカツサンドは揚げたての厚いカツと濃厚ソースが絶妙のバランスで納得のうまさに元気をもらった（写真29）。

大災害後の地域医療を守るには

この原稿を書き終える頃、広野町の高野病院（社本博院長）を扱った東京新聞Web版が入手できた。福島第一原発から30㎞圏内で孤軍奮闘、地域医療を必死に守って来た高野己保理事長が23年11月顧問に退いた。これまでの頑張りに敬意を表し心からお疲れ様と伝えたい。医療法人社団「養高会」新理事長には小澤典行先生を迎え、今回クラウドファンディングを起ち上げて、高齢化する地域のニーズに合った立て直しを図る。地震を始め様々な厄災が起こる日本で、もともと過疎・高齢化していた地域が壊滅的な状態になったらどうするか。今回の能登半島地震でも問われる課題である。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊ 随筆・紀行

遠く馳せる想い

24年１月２日に撮った裏磐梯の風景である(写真30)。誰が作ったか可愛い雪だるまが太陽の光を浴びているが、どことなく寂しげなのは、遠く能登の方を見ているからか。発災から２ヶ月以上経っても厳しい状況が続いている。長期化による避難疲れが心配だ。私たちも同じ思いを経験している。諦めないでほしい。必ずや希望の光が差し込んで暖かな春が待っている。一日も早く心が安らぐ日が来ることを小さな雪だるまに託す。

(相馬郡医師会)

（写真30） 遠く馳せる想い